
魔法少女リリカルなのはFreedom&Justice

自由と正義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはFreedom&Justice

【Nコード】

N0469K

【作者名】

自由と正義

【あらすじ】

ストライクとイーリス互いに憎しみのまま殺し合い死んだ筈の2人。

だが、少年達は生きていた…。

見た事もない聞いた事もない魔法という力の存在する世界に…。

傷ついた少年二人はそこで何を感じ、何をするのか…。

魔法少女リリカルなのはFreedom&Justice:Take
Off

PHASE 00 憎しみの果てに…（前書き）

はじめまして自由と正義といいます。

今回書かせて頂くのはなのはと種のクロスオーバー作品です。

二次創作となりますので苦手な方は気をつけてください。

見ない方がいいかもです。

それでもOKですよとおっしゃってくださる方はお読みください！

まだまだ駄文ですがよろしく願います！

後、序章は魔法が欠片も出ないのでよろしく願います。

PHASE 00 憎しみの果てに…

雷鳴が轟き、天からはまるでバケツをひっくり返したかのような激しい雨が降り続ける。

感じる筈もない強烈な暴風も、自らの操縦する機械の巨人を通して感じるかの様な錯覚も感じる。

嵐。

この天候を一言で表すならその一言だろう。

そして…その表現は、この名もない海に囲まれた孤島でぶつかり合う2体の巨人達の操縦者の心情を現しているかの様でもあった。

白と赤の巨人。

この2体の機体 Mobile suit と呼ばれる人型機動兵器は、何度も何度も激しくぶつかっていた。

いや…赤の機体「イージス」が一方的に白の機体「ストライク」をその両腕から伸びた金色の光の刃「ビームサーベル」で攻め立てている。

ストライクはそれを左手に装着されているシールドで受け止め、その場から飛びのいていく。何度も何度もイージスはストライクを攻め立てるが、それでも大したダメージは、与えられない。

がむしゃらだ。

両腕を振り回し、その刃を突き立てようとする。

冷静に見れば、このような攻撃は、ここまで数々の戦場をたった一人で潜り抜けてきたストライクのパイロット「キラ・ヤマト」にしてみれば避ける事も造作もない事なのだろう。実際、今のストライクとイージス。この2体どちらが優勢かと聞かれれば、誰がどう見てもストライクと答えるだろう。無駄な動きを排除し、無駄なエネルギーを使わない効率的な戦い方をしているストライクと、がむしゃ

らに動き回るイーギスでは同じエネルギー量のパックを積んでいようが、先にエネルギー切れを起こすのは一目瞭然である。

そして、戦場でのエネルギー切れ。動けなくなるというのは死を意味する。

だが：それは客観的に見て、そしてその場にいない第三者の意見として言うならである。

MS。この機械の巨人は唯の道具に過ぎない。そう戦う。戦争の道具でしか。

そして、それを動かす操縦者は人間であり、人間というのは時にあり得ない力を発揮する事もある。また逆に、本来の力を発揮できない事とであるのだ。それは、心の在り方で決まる。

そして、今相対するストライクとイーギス。

この2機のパイロット「キラ・ヤマト」「アスラン・ザラ」には、それぞれ決定的な心の在り方の違いがあった。片や怒りと憎しみ片や悲しみと戸惑い。

「キラアアアアアッ！！！」

「くっ…！」

アスランは敵対する相手の名を初めて憎しみと怒りを込めてわめき散らしながらサーベルで斬りかかる。

かつての幼馴染で弟みたいな存在でそして親友だった友の名を。

その圧倒的な重圧にキラは、戸惑いを感じながらそれを再びシールドで受け止めその腕をいなすと、距離を取る。

キラは、目の前で自分に憎しみをぶつけてくる親友の言葉を重く受け止めながら、攻撃を受け続ける。

互いに思う事は1つ。

なんで！？

なんでこんな事になったんだ!?

キラ・ヤマトにアスラン・ザラ彼等2人は、今互いにMSという戦争の道具である兵器に乗って殺し合っている。

何故!?

互いに大事に思っている親友同士だというのに!!

その2人が何故戦わなければならない…。

その答えは簡単だ戦争だからだ…。

C・E70。遺伝子操作で誕生した新人類コーディネイターの組織ザフトと旧人類ナチュラルの離宮連合との戦争が始まってから11カ月が経ったある日。

その日から、二人の少年の運命は狂い始めた。

この戦争の時代の中唯一つ中立を保っている国オーブ。そのオーブの所有する宇宙空間で人々の生活を可能にしたコロニーの1つ資源衛星ヘリオポリスで運命の歯車はギシギシと歪み始めたのだ。

その場所は本来、戦争なんて関係ない…そんな外とは隔離された1つの平和な世界だった。

キラも戦争なんて自分達には関係ない事だと…そう思っていた。

だが…そんな世界で、キラはあり得ないモノと邂逅する。地球軍の開発した新型MS通称Xナンバーの内の1機。後の彼の機体となるストライクと呼ばれるMSだった。そして、ザフトは、このストライクを含めたXナンバーと呼ばれる機体の奪取作戦を開始。多くの民間人を巻き込みヘリオポリスは戦場と化した。そして、キラもその作戦に巻き込まれ止む無く、ストライクで戦う事となる。だが、この時キラは、自身の愛機との邂逅と共にもう一つの邂逅を果たした。かつての親友そして今現在イージスに乗り自らを殺しに来ているアスラン・ザラとの再会だった。

何故？何故、彼がザフトに入って戦争をしている？

何故？何故、アイツが地球連合の味方をする？

かつて、再会を誓いあったかつての幼馴染の親友同士はこうして望まない再会を果たした。

その後は、何度も何度も2人はぶつかり、戦いあった。

何故、お前と戦わねばならない！？

守りたい…友達がいるんだ！！

何度とアスランはキラを説得させ自分と共に来いと誘う。しかし、キラはそれを全て拒否し続けてきた。その理由は、彼の所属する新建造館アークエンジェルには、自分の乗るストライクしか戦力と呼べる物はなく、ストライクはコーディネイターであるキラにしか動かせないからだ。それだけなら、キラは迷わずアスランに付いて行っただろう。だが…あの艦には、キラの学友。自身をコーディネイターとして知りつつもキラを友人として見てくれている大事な人達が乗っているのだ。

その理由に、アスランもキラも涙を流しながら次に会えば敵同士だと…そう決別した筈だった。

だが…そんな事は心のどこかであり得ないことだと踏んでいたのだ。2人共。

“アスランが僕を殺す筈ない”

“キラが俺を殺す筈ない”

そう互いに心の中で無意識下で思っていたのだ。

そして、その結果。

1つの悲しい結果が現れた。

キラはこれまでの幾つもの激戦を潜り抜けその力は既にエースパイロットの域にまで達していた。

そしてキラはアスランを難なく追い詰めていく。

こちらは、4体対して、向こうは1体。

万全の構えでかかったにも関わらず、アスラン達は、敗北寸前まで追い詰められていた。

「やめろ！アスランっ！僕はもうこれ以上君と戦いたくない……！！」

アスランは本気でキラにぶつかっている。キラはストライクは決して本気をだしていない。それでも、こちらは負けているのだ。

自身の力の無さに：弟の様な親友に自分の力が通用しない事に、かつて力がなくそれ故欲した自身の力を今の自分の存在を否定された様でアスランは激昂した。

しかし、その結果イージスはエネルギー切れを起こし、その力を失った。

その時だった。アスランを庇う様に、黒い影がキラを襲いかかった。ミラージュコロイドと呼ばれる特殊なステルス性を宿したXナンバーブリッツがその力で姿を隠しキラにストライクに襲いかかった。

その動きはあまりにも早すぎた。警告音が発するよりも先に鍛えられたキラの戦士としての本能が無意識の内に自然とストライクの体を動かしていた。

そしてアスランもそれを呆然と眺めているしかなかった。

ストライクは、その性能上3つの形態を持つ。接近戦、遠距離線、高機動戦を目的にバックパックを変える事であらゆる戦場に対応する事が出来る。

そして、この時、不幸にもキラのストライクは接近戦用のソードストライクでこの戦場に

立っていた。その両手には、巨大な対艦刀シュベルトゲベルが握られていたのだ。

ごく自然な動きでキラはブリッツの攻撃を避けるとそのそのまま吸い込まれる様にビームの光が刃がその腹部をコクピットを薙ぎ払った。

ブリッツはその場で、閃光を走らせながら爆散する。

キラもアスランも呆然とその光景を眺めていた。

そして、その破片が辺りに散らばると、そのブリッツの半壊した頭部がイージスの足元に、原型を留めていない腕がストライクの足元に。

それをゆつくりと視認する。

「ニコルっー！！！！！」

アスランは無意識下でイージスの手をブリッツの残骸へと手を伸ばし絶叫した。

そして、その絶叫にキラも今自分がしでかした事の重大さを知る。ストライクは戦闘意識が無くなったかのようにその場で対艦刀をその手から落とすとその場で佇んでいた。

アスランの。親友の悲しみの絶叫がキラの心をじわじわと締め付けた。

大事な人だったんだと…。

彼だって大事な友達を守る為に戦っていたんだと、今この時気付いたのだ。

そして、その友達を自分が殺してしまった…。

キラはその事に気付いていなかった事に…アスランにも殺してしまったブリッツのパイロットにも罪悪感を感じていた。

“俺の罪だ…”

アスランは今までの自分の甘さが…こんな結果を産んだんだと…。そう自身の罪を涙を流しながら認めると同時に、彼の中で初めて親

友のキラの命を奪う事を決意する。

大事な者を自分の手で……。それこそが……。自分に課せられた罰なのだとそう信じて。

そして、今2人は嵐の中の孤島でぶつかり合っていた。

ストライクは合いも変わらず、イージスの攻撃を避け、いなし、的確に反撃するが、イージスもその動きに付いてくる様に、序々にストライクを追い詰め始める。

「くっ……」

コクピットがイージスのサーベルをシールドで受け止める際の衝撃で揺れる。

そこから見える嵐の中、雨に打たれて、降り注ぐ雨を蒸発させていく金の刃もその真紅の機体も何か得体の知れない恐ろしい程の気迫が漲っている様に見える。

「キラアアアアアア……!!!」

アスランは何度も何度も親友の名を口にしながらストライクを攻め立てる。

なんで……。なんでお前が俺と戦う……!!

なんでナチュラルの為に……!!

なんで……。なんで……。俺と共に来てくれなかった……!!

そんな思いと憎しみがアスランの心の内をのたうち回る。

ありえない光景を……。自分とキラとニコルとで楽しく会話をしている様なそんな幻想まで浮かんでくる。

ニコルは優しい奴だった……。ピアノが好きで、家族思いで。

絶対にキラと会えば気の合う良い友人になれたと思っていた奴だった……!!

だからこそ、そんな光景を潰したのがキラ自身の手である事がアスランは許せなった!!

そして、そんな結果を引きよせた自分自身も許せなかった!!
だから…もう迷う訳にかいかなかった。ここで!!

「キラを討つッ!!!」

イージスは空中に跳びあがるとその形をまるで大きな獣の顎の様な形態へと変形させるとそのまま中心部から赤黒い高出力のビーム「スキュラ」を放つ。

「まずいッ…!?!」

キラは咄嗟にストライクを動かし、何とかそのビームを避ける、いくらストライクでもあの戦艦を一撃で沈める様なビームに当たっては、ストライクも只ではすまないだろう。

だが、無理な体勢から避けた所為か…ストライクはその体勢を一瞬崩してしまう。

そして、今のアスランはその隙を逃す程、甘くもなければ優しくもなかった。

「お前がニコルを…ニコルを殺したあああああ…!!!!!!」

「!?!?」

改めて親友の怒りの呪詛の言葉を聞いたキラは自然とシールドを構えていたが、その心の内では

（「……もう駄目だ」）

そう呟いていた。もう戻れない。もうアスランとは分かりあえない。

僕は君の大事な友達を殺した。そして君は僕を絶対に許さないだろう。

この場を何とかしても、何度でも僕を殺しにくる。
でも…僕は…

（「戦えない…」）

かつてアスランに今度会えば撃つと言っておきながらキラにはそんな事は出来もしなかった。

そう気付いた。

僕には…アスランは撃てない。

なら…いっそ、もう。

ストライクは構えていたシールドを解くと、呆然と襲いかかるイージスを真紅の機体と黄金の刃を見つめていた。

「キラ!!」

「!??」

その時だった。不意に空から聞き慣れた友人の声が聞こえてきた。自然とストライクはイージスのサーベルをシールドで防ぎその場から離れる。

そして空を見上げるとそこには白と青でカラーリングされていた戦闘機が姿を現していた。

スカイグラスパー。

ストライクのサポート機でその最大の特徴はストライクのバックパックを装着出来、そしてそのパックをストライクへと譲渡する事が出来る事だ。

だが、いまのこのスカイグラスパーにはバックパックは装着されていない。

このスカイグラスパーのパイロット。キラの友人の一人の「トール」

の駆る機体がそのままイーゼスに向けてミサイルを放つ。

イーゼスはそれを、跳躍して避ける。

だが、それが裏目に出た。イーゼスはストライクよりもこの場に乱入してきたスカイグラスパーを睨みつけた。

（「邪魔を…するな!!」）

アスランは心の内でそう叫ぶと、そのまま跳躍する。

それを見たキラは、叫び声を上げる

「駄目だ!! 来るなああああ!!」

キラの叫びがトールの耳に届くよりも先にイーゼスはその自らの盾を回転させながら投げつける。そしてそのままトールのスカイグラスパーのкокピットに突き刺さる。

キラのコーディネイターとしての優れていた視力が友人の最後を見つめていた。

碎ける破片に…弾け飛んだヘルメット。

そして飛び散る赤い…赤い血。

そんな光景も最後には…

「トールッ!!!!!!」

キラの叫びと共に閃光に包まれ爆散した。

「うわああ…あっあああああああッ!!!!!!!!!!!!!!」

ストライクはその手をスカイグラスパーが飛んでた空へと向けるがその手が何も掴む事はない。

そして、ストライクの前にゆっくりとイーゼスが着地する。

雷が鳴り響くと共に、ストライクを照らし出す。イエローの二つの瞳は天から降り注がれる雨により只ひたすら涙を流しているかの様にも見えた。

ストライクは視線をうつ向かせるとそのまま睨むように目の前の機体を確認する

「アアアスラアアアアンツ！！！！」

目の前の親友の名をキラも初めて憎しみを込めて叫んだ！！

トールは：トールはコーディネーターの僕を：分け隔てなく受け入れてくれた友人だった！僕に拳銃が向けられた時だった庇ってくれた！

スカイグラスパーに乗ったのだって、僕の助けになりたいからって言って：必死にシュミレータで練習して：。

僕の背中なんかを見て「自分も頑張らないとなあ」って：そんな風に言ってくれた大事な大事な：友達を：なんで！！なんで！！アスランがあああああ！！！！

それと同時にキラの中で何かが弾け飛ぶ。

そのまま右手でサーベルを握り、イージスに振り下ろす！！

瞳から涙が零れるのも気付かず、只怒りのままストライクを動かしかつ続ける。

そしてイージスもまたストライク同様に両腕でサーベルを振り回すと斬り合いを始める。しかし：ストライクは今までに見た事もない早さでイージスを突き飛ばすとサーベルを振り上げて一閃する。

「なっ：！！！？」

アスランが驚きの声を上げるよりも先にイージスの左腕が切り離さ

れる。

そして、そのままストライクは瞬間にイージスの顔面を蹴り飛ばす。

その姿はまるで獣だ。

なりふり構わず襲いかかるその姿は。

「キラアアアアア！！！」

アスランも叫びながら残った腕を脚からサーベルを出現させるとストライクに襲いかかる。

そして同時にアスランの中でも何かが弾け飛ぶ。

思考がクリアになる。機体がイージスがまるで自分の体の一部にでもなったかのように……。その感覚のままイージスを駆るとそのままストライクに襲いかかりお返しとでも言う様にその左腕を斬り飛ばす！！

「うああああああ！！！」

「はああああああ！！！」

2人共わめきながら、涙を流しながら只、ひたすらにサーベルを振るいあう。

ストライクがイージスの頭部を突き刺して破壊する。

イージスのサーベルがストライクのコクピットハッチを切り裂く。

それでもお構いなしに2機は殺し合う。

いつまでもいつまでも……。

だが、そんな戦いも決着がつこうとしていた。

変形したイージスが、懷にもぐりこみストライクに噛みついたのだ。

「終わりだ……」

アスランは勝利を確信すると今までの彼からは考えられない程の残酷な笑みを浮かべるとスキュラのトリガーを引こうとする。
ストライクは何とか逃れようと足掻く。

無駄だと思いながらその光景を見つめるとトリガーを引く。

しかし…そのトリガーはむなしく空撃ちに終わる。

良く見れば警告音と共にエネルギー切れが起きていた。

イージスの真紅の機体が灰色へと変わっていく。フェイズシフトダウン。フェイズシフト装甲と呼ばれる装甲特有の現象であり、エネルギーが切れるとその役目を果たさなくなる様にその色が灰色に戻るのだ。

ストライクのイエローの二つの瞳がアスランを射抜く。

ストライクはイージスと違い、最初の方の戦い方での消費が少なかったのだろう。その装甲は未だ白かった。

キラは、そんなフェイズシフトダウンするイージスを見つめながら、チャンスと思い何とか組みついているイージスを外そうとする。

「……」

アスランはそんなストライクを睨みながら、手元のボタンを1つ押し、素早くキーボードを叩く。そう暗証番号だ。モニターに残り10秒というカウントダウンが表示される。

自爆装置だ。機体が今にも自爆しそうな程に唸りを上げ始める。

これで…終わりだ。キラも…俺も…。

「えっ？」

キラはなにが起きたのかも分からず視界一杯が閃光に包まれるとそのままストライクとイージスは爆炎と閃光を上げながらその場で爆発した。

PHASE 00 憎しみの果てに…（後書き）

…駄文だ。

アニメ見ながら書いたけどまだまだな気がします…。

次回にミッドチルダに飛ばす予定です。

なお、アスランはこの作品では、最後脱出していませんので、そのまま飛んで言ってもらいます。

感想とかアドバイスとかあればよろしくお願いします…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0469k/>

魔法少女リリカルなのはFreedom&Justice

2010年12月13日18時52分発行